
書評

玉木俊明著『拡大するヨーロッパ世界：1415-1914』
(知泉書館，2018年)

橋本武久

1. 玉木史学との邂逅

畏兄とは、今日ではどの辞書にも記載がなく、ネットで検索した限りではもはや使われなくなった言葉であるようだが、博覧剛毅で鳴る玉木俊明教授は筆者にとってまさしく学問上の畏兄である。会計史を専門とする筆者が、経済史の門外漢でもあるにもかかわらず、経済史学者である玉木教授の高著の書評を行おうとした理由はそのような思いにある。以降は敬意と親しみを込めて玉木さんと呼ばせていただこう。

2010年4月、筆者は本学に移籍してきた。出勤初日、まだ片付けも終わらず雑然とした研究室に玉木さんが突然現れた。「あなたが橋本さんですか。私の文献を引用してくれてありがとう」。確かそのような言葉で始まった会話は3時間以上にわたった。玉木さんとの初めての直接的な邂逅であった。

筆者は、主として17世紀のネーデルラント（今日のオランダ、ベルギーとその周辺を指す地域）における会計史を専門としているが、一般に会計史研究においては、複式簿記が、ヘゲモニー国家（玉木さんによれば、「他より圧倒的に強力な経済力をもつ国家」）、あるいは経済発展の中心地の移動とともに、それぞれの地でどのように革新をし続け、会計学へと展開したのかを明らかにしようとしてきた。そして、それゆえ、複式簿記の革新の本質を理解するには、その社会経済的背景の変化を見なければならないのであり、会計史研究は、経済史学の成果に大きく依存し、また期待を抱いてきたのである。

しかしながら、それらの多くは、それぞれの国や地域の歴史に特化し深化したものであり、これらを横断的に論じた成果はあまり多くはなかった。それぞれが深遠で素晴らしい業績であっても複式簿記の伝播とそれに伴う革新の背景を描写するには限界があったのである。

一方、玉木さんの仕事は違っていた。国や地域の垣根を超えたスケールの大きさと柔軟性を持っていた。会計史研究には非常にありがたいフレームワークを提供してくれたのである。本稿は、そのような玉木史学に対する会計史研究者による紹介文であり応援歌でもある。

2. 本書の構成と特徴

玉木さんの第一の主著は『北ヨーロッパの商業と経済 1550-1815』（知泉書館，2008 年）である。筆者は同書からも多くの知見を得てきた。同書では 1550 年ころから 1815 年までのオランダ、そしてイギリスがヘゲモニーを握るまでの北方ヨーロッパの商業・経済の変遷を描いており、同じ時代の会計史を研究する筆者には大変刺激的な著作であった。なお、玉木さんは、同書により翌 2009 年 3 月に大阪大学から博士（文学）の学位を授与されている。

そして、それから 10 年を経て第二の主著ともいべき本書が刊行された。まず本書の構成と特徴を明らかにするために、以下のように玉木さんの二つ主著の比較から始めてみたい。

玉木（2008）	玉木（2018）
序章	序章
第 1 章 商業資本主義の諸相 補論Ⅰ 経済発展と国家の役割 ー 国家財政と商人のネットワーク	第 1 章 小さなヨーロッパから大きなヨーロッパへ
第 2 章 地中海からバルト海へ ー 1600 年頃のヨーロッパ経済の中心の移動	第 2 章 北海・バルト海・地中海経済圏の統合
第 3 章 「穀物の時代」のバルト海 1561-1657 年ー『エアソン海峡通行税台帳 前編』の分析	第 3 章 大西洋経済の形成 補論Ⅰ プロト工業化とは何だったのか
第 4 章 近世スウェーデンのバルト海貿易ー「大国時代」を中心に 補論Ⅱ スウェーデンの貿易とフィンランド・イエーテボリの関係	第 4 章 商業情報の中心アムステルダム
第 5 章 「原材料の時代」のバルト海貿易 1661-1780 年ー『エアソン海峡通行税台帳 後編』の分析	第 5 章 重商主義社会から帝国主義時代へー数量化・可視化傾向がもたらした変化
第 6 章 イギリスのバルト海・白海貿易 1661-1780 年ーオランダとの比較を中心に	第 6 章 アジア・太平洋とヨーロッパ 補論Ⅱ ディアスポラの経済史 ーアルメニア人・セファルディムとヨーロッパ経済の拡大
第 7 章 ハンブルクの貿易ーもう一つの世界システム 補論Ⅲ 18 世紀の世界貿易拡大と北方ヨーロッパ経済の変貌	第 7 章 世界を変えたイギリス帝国と情報ー蒸気船と電信
第 8 章 ヨーロッパの経済発展とオランダの役割ーロンドンとハンブルク	
終章	結語

この表から明らかなように章の数だけをみれば本書は 7 章立てであり、前作よりも 1 章分少ない。しかしながら、総頁数はむしろ増加し、439 頁の堂々たる大著となっている。

玉木（2008）での研究の視座は、地中海からバルト海へと南北の軸であったが、本書では、東西の軸を加え、大西洋やアジアにまで視座を広げ、また対象となる時代も前後併せて 200 年近くに拡大している。次に各章の内容についてみよう。

第 1 章で玉木さんは、ヨーロッパがどのようにして海外に進出していったのかを論じている。もともとは小さな世界でしかなかったヨーロッパがどのようにして拡大していったかについて、その 3000 年間の歩みを描写しており壮観である。

第 2 章は、玉木さんがこれまで最も時間を割いてきた研究分野を凝縮した部分であり、かつこれ

以降始まる本論のプロローグにあたる。中世に全盛を極めた地中海経済圏が、北海・バルト海経済圏に必然性をもって飲み込まれていく様子を、抑揚なく冷静に述べている。

第3章は、大西洋がヨーロッパの内海として包含されていく様子をさまざまな視点から論じている。大西洋貿易の特徴として砂糖革命や奴隷貿易を論じ、さらにはポルトガル、スペイン、オランダ、フランス、イギリスなどのヨーロッパ各国の動向を分析し、最後にヨーロッパと大西洋の統合にはアメリカ船が大きく寄与したこと、その中でもっとも重要な役割を果たしたのがユダヤ人であるセファルディムであったことを明らかにしている。

第4章は、商業における情報の重要性について、アントウェルペン、アムステルダムという二つの世界都市を中心に詳細な検討を行い、これらの都市のヘゲモニーの源泉が強大な権力にあるのではなく、商業情報にあったことを明らかにしており、これについては次節で詳しく論じたい。

第5章は、17世紀の重商主義時代から19世紀の帝国主義時代にかけてヨーロッパがどのように変貌したのか、すなわちその内生的発展を、イギリスを対象として、前半では決済システム、後半では労働問題を中心に、「数量化し可視化する社会の誕生」という観点から論じている。

第6章で玉木さんの視座はいよいよアジアに向けられることになる。重商主義の担い手であった商人たちのアジアでの活動を分析する。最初にアジアに進出したポルトガルの海洋帝国の構造、そして英蘭の東インド会社の進出の意味を問い、ヨーロッパの拡大が、ヨーロッパの商業書簡や商慣行を「共通の言語」として広めたことに他ならず、アムステルダムを中心としてできあがった商業空間が広まったことを指摘している。

最後の第7章では、オランダに変わりヘゲモニー国家となったイギリスの歩みに筆を進める。イギリスの発展にとって、蒸気船や鉄道とともに、海上保険業を大きく発展させたことも大きな要因であったとしている。しかし、ここでもっとも重要なキーワードは情報であったが、オランダやポルトガルとは異なり、この流通に大きく関与したのは国家であったことが指摘されている。とくに国家の軍事政策の一環として構築された電信というシステムの影響は大きく、これによりイギリスは、世界の商業情報や貿易の決済の中心となり世界制覇ができたとするのである。

このように、本書は、玉木（2008）ではやや影が薄かったヨーロッパ世界の東西の拡大を描写しつつ、ヒト・モノ・カネの流れだけではなく、情報という名の「無形財」をキーワードとして、ヨーロッパ世界の拡大の本質を論じたものである。なお、この他に大変興味深い補論が2編含まれているが、紙幅の関係でここでは触れない。次節では会計史研究者の立場から本書の意義を考えてみたい。

3. 玉木史学の視座と意義：世界都市アントウェルペンとアムステルダムをめぐって

会計史を専門とする筆者が、本書の内容でもっとも魅かれるのは、会計史上において重要なアントウェルペンとアムステルダムに関する玉木さんの学説である。

玉木さんはまず、「中世のイングランドは羊毛の輸出国であった。ところが15世紀初頭から中葉

にかけ、未完成の毛織物輸出国に変わる。イングランドの経済的地位は、ここで大きく上昇した。イングランド産の輸出毛織物は、ほとんどがアントウェルペンに向かった。近世の毛織物の輸出において、ロンドンは、イングランド全体の毛織物輸出量の8-9割を占めた。その大半は、マーチャント・アドヴェンチャラーズによってアントウェルペンに未完成のまま送られ、そこで完成品となり、ドイツやイタリア、レヴァントに輸出された。イングランドからアントウェルペンに輸出する毛織物こそが、北海をまたぐ貿易品のなかでもっとも重要だったのである」(玉木 2018, 95-96) として、アントウェルペンの台頭の原因を明らかにする。

また、玉木さんは、グーテンベルクの活版印刷術の革命に言及する。これにより「商売の手引き」が容易に印刷発行されるようになり、(国際) 商業のマニュアル化を促進し、商業帳簿・通信文・契約書類などの形式が整えられていき、取引は容易になったと指摘する。その結果、ヨーロッパ市場は、近世のあいだに徐々に統合されていったと推測している。

そして、そのような市場では商業新聞が発行されるようになり、北方ヨーロッパで最初に、16世紀前半にこれを発行したのがアントウェルペンであり、ここではシャンパーニュに代表される中世以来の大市と称された国際的定期市に代えて、世界初の常設の取引所(bourse)が設けられたと述べている。

このような見方は、複式簿記と会計思考の史的展開過程とまったく軌を一にする。すなわち、13世紀末から14世紀末にイタリアで生まれたとされる複式簿記は、当時の経済の中心地の名を冠してヴェネツィア式簿記と称され、その優れた機能とともに、当地が出版の中心であったこともあり、そこで発行された簿記書とその技法は商人の移動とともにヨーロッパ各地に伝播したと考えられている。そして16世紀に至り、アントウェルペンに常設の取引所が設置されたことから、それまでの大市における遍歴商の、いわば「売切れご免」の商売から、定住商人による商取引の恒常化という事態が現出し、このような変化を受けて、それまでの口別損益計算に代わり、人為的な期間を設けて損益を計算する期間損益計算という近代的な会計思考が生まれたとされるからである。

また、玉木さんは、「アントウェルペンで生まれた商業システムは、アムステルダムに受け継がれ、やがて世界を覆うようになったのである。ここから、近代システムの開始を、アントウェルペンに求めることに十分な意味があることが理解できよう。アムステルダムの台頭も、ロンドンの成長も、『アントウェルペン商人のディアスポラ』なしでは考えられないのである」(玉木 2018, 178) とするとともに、アントウェルペンが本質的にヨーロッパ諸都市と強く結びついた商業都市にとどまっていたと指摘する。

つぎにアムステルダムの特徴について玉木さんは、アントウェルペンと比較して、その取引相手が全世界におよび、商業規模が圧倒的に大きかった点に求め、「オランダ東インド会社のヨーロッパの根拠地はアムステルダムにあったことから判明するように、アムステルダムは世界に開かれた商業都市であった。・・・1602年に連合東インド会社が、1621年には西インド会社が創設されたことがそれを証明しよう」(玉木 2018, 183 頁) と評価する。

また、玉木さんは、「有形財の貯蔵には巨大な空間が必要である。しかし無形財である情報の貯蔵には、大きなスペースはいらない。したがって、アムステルダムは『情報のステープル』になることができた」（玉木 2018, 184）とし、それを可能としたのは「近世のヨーロッパ都市としては驚くほど宗教的寛容に富んだ都市であった」（同前）ことだと指摘している。

より具体的には、「17 世紀ヨーロッパ商業の中心地となったアムステルダムにとって、もっとも重要な機能は、商品の流通と情報の集約・発信地という点にあった。・・・アムステルダムを通じて、ヨーロッパのさまざまな宗教・宗派に属する商人の取引が可能になったと考えるべきであろう。多種多様な商人の商業技術がこの都市に蓄積された。・・・アムステルダムに移り住んだ商人は、出身地の商業ノウハウ、ネットワークなどをアムステルダムに持ち込んだ。・・・そのような情報がヨーロッパ各地に伝播していったのである。アムステルダムは、ヨーロッパの出版の中心であり、情報センターであった」（玉木 2018, 204-205）と述べ、商品（有形財）の取引・流通ばかりではなく情報という無形財こそが経済の発展には重要であること、ヘゲモニーの源泉となることを明らかにしている。

会計史学の立場からは、アムステルダムが経済発展の中心地であり、重要な都市であることを背景に、オランダ東インド会社の成立と複式簿記の革新を説明してきたが、両者には（少し話がうますぎるといふ）微妙な距離感が存在した。しかし、玉木さんがいう情報というキーワードを用いれば、その距離は小さくなるであろう。

すなわち、これらの都市における複式簿記の技術や会計思考の革新が、イギリスに伝播する背景も、玉木さんが指摘するアムステルダムの情報収集能力とその伝達力が寄与し、さらにこれらが商業のマニュアル化の一環として見る如果能够できれば、会計史学はこの時代・地域の経済実態をよりの確に把握し、説得力のある論を展開することができると考えられる。

また、ウォーラスティンの通説とは異なり、「近代世界システムのヘゲモニー国家がオランダ、イギリス、アメリカであるとすれば、中核都市は、いうまでもなく、アムステルダム、ロンドン、ニューヨークとなる。これらは、工業都市ではなく、金融都市である」（玉木 2018, 188）とする玉木さんの見解は、複式簿記や会計思考の史的展開過程をこれらの都市における社会経済的背景の変化、とくに金融のそれと結びつけて論じる会計史学の正当性を力強く担保するものと評価できるのである。

4. おわりに：玉木史学のすすめ

ここまで筆者が関心のあるアントウェルペンとアムステルダムに関する玉木さんの見解を中心に本書を論じてきた。玉木さんは、その驚異的な語学力と構想力で、ヨーロッパ世界の拡大を文字通り縦横無尽に論じおり、それはこれまでの経済史にはない世界観であった。

しかし、このような玉木史学の在り方に対して批判はないのであろうか。また、なぜ玉木さんはこのような研究スタイルを貫いているのか。これについて玉木さんは次のように述べている。

「本書のように、長期間かつ大きな領域を扱う研究は、専門家からみれば、本当に重要な文献に目

を通していないという批判を必然的に受けることになろう。もとより、それは覚悟のうえである。そのような批判に対して、私は、歴史家として全体像の提示を重んじたという解答をしておきたい。・・・全体像とは何か、簡単に定義できるものではないが、世界はこのようにして動いたのだという自分なりの見方を示したいと思うようになった。本書は、そのような問題意識の産物である」(玉木 2018, 386-387)。

玉木さんのいう全体像が多くの人々に共有されているのか、あるいは共有されうるのか、また、共有されたとして、それは従来の研究手法では描写しえないのかについて、筆者はにわかには答えることができない。しかしながら、ここに引用した玉木さんの言葉には、新しい歴史観を切り開く開拓者としての覚悟と、ヨーロッパの拡大過程について、玉木さんなりの全体像を描き切ったという自信を見出すことができるのである。

確かな見識と覚悟をもって書かれた本書は、経済史や会計史の研究に貢献するのみならず、研究者とは如何にあるべきかと考えさせてくれるのである。その意味からも本書は、研究者はもとより、これから研究者を目指す人々にも、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。